

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K10285

研究課題名（和文）自閉症スペクトラム障害をもつ人のための「未来語りのダイアログ」実践モデルの開発

研究課題名（英文）Anticipation Dialogues for people on the autism spectrum

研究代表者

川田 美和（Kawada, Miwa）

兵庫県立大学・看護学部・教授

研究者番号：70364049

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：未来語りのダイアログ（Anticipation / future Dialogues以下AD）は、心理的あるいは生活上の問題を抱える当事者、家族、多職種の支援者間で連携がうまくいかない、支援が行き詰まっている等、何らかの困難が生じた場合の問題解決のための対話手法である。希望的な予測を立てることで、現在直面している問題への不安を軽減し、最終的には、各参加者がより良い今後のためにすべきことを具体的にしていくという手法である。

本研究では、成人期の高機能ASD者支援における未来語りの効果検証を行うことを目標とした介入研究を実施し、参加者の体験や我国でADの汎用性を高めるための方略を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、我国における未来語りのダイアログ（AD）に関する初めての実証的研究である。結果より、高機能自閉症スペクトラム症をもつ人の支援におけるADの有効性が明らかになった他、支援者や家族のエンパワメントや支援者間の連携強化につながることも明らかになった。また、本研究では、ASDの特性を踏まえた展開方法の工夫や我国における汎用性を高めるための方略についても明らかにしており、ASDをもつ人への新たな支援方法に重要な示唆を得るとともに、ADの日本への導入に向けた貴重な資料となり得る。

研究成果の概要（英文）：Anticipation / future Dialogues (AD) is a dialogue approach for problem-solving when there are difficulties between people with psychological or life problems, their families and multidisciplinary supporters, such as poor cooperation or stuck support. By making hopeful predictions, the technique reduces anxiety about the problems currently faced and concretises what each participant should do for a better future.

In this study, an intervention study was conducted with the aim of testing the effectiveness of future storytelling in supporting people with high-functioning ASD in adulthood, and participants' experiences and strategies for increasing the versatility of AD in our country were identified.

研究分野：精神看護

キーワード：ダイアログ 対話 自閉スペクトラム 未来語りのダイアログ オープンダイアログ 多職種

1. 研究開始当初の背景

未来語りのダイアログ（Anticipation / future Dialogues 以下 AD）は、心理的あるいは生活上の問題を抱える当事者、家族、多職種の支援者間で連携がうまくいかない、支援が行き詰まっている等、何らかの困難が生じた場合の問題解決のための対話技法である。具体的には、ファシリテーターが参加者に①未来（概ね半年～1年後）の希望的な状況（例：就労して周囲との関係が良好など）について質問する、②それが実現したと想定しその時点に立ってもらい、③実現のために自分がしたことや役立ったことを想定し語ってもらい、④未来から見た現在の心配事について語ってもらい、という流れで進行する。希望的な予測を立てることで、現在直面している問題への不安を軽減し、最終的には、各参加者がより良い今後のためにすべきことを具体的にしていこうという手法である（Seikkula & Aenkil, 2006、白木, 2014）。

大きな特徴は、主に支援者の困り事（心配）を取り上げる点である。複数の支援者が関わっているにも関わらず、当事者や家族の状態が改善せず、関係者間の連携もうまく機能しないまま支援者の心配が増大していくという状況は、支援現場で頻回に生じる。未来語りは、こうした状況の解決策として有効である。さらに、未来語りは、専門職間の連携に加え、当事者の日常のサポート・ネットワークがうまく機能することも目指しており、友人や職場関係者など、当事者の日常を支える人達に話し合いに参加してもらおう点も特徴的である。

AD は、北欧ではすでに多くの実践例があり、効果も認められているが、日本で実証的研究は未だされていない。筆者は、これまでの支援経験から、1) 成人期の高機能自閉症スペクトラム障害者（以下、ASD 者と示す）支援において未来語りは有効であると考えたこと、2) ASD 者支援において、当事者・家族・支援者間の連携は特に重要であること、また、3) 未来語りは今後の看護学にも貢献できると考えており、本研究に着手することとした。本研究では、実際に、ASD 当事者とその家族、支援者の話し合いを未来語りの形式で実施することを通して、効果検証を行うことを目的とした。

2. 研究の目的

成人期の高機能 ASD 者支援における未来語りの効果検証を行うことを目標とし、本研究では、以下を明らかにすることを目的とした。

1. 未来語りでは、どのような対話のプロセスが展開されるのか
2. 未来語りに参加した ASD 当事者、家族、支援者は、どのような体験をするのか
3. 未来語りを実施した後、ASD 当事者、家族、支援者には、どのような変化が生じるのか
4. 日本で ASD 者支援として実施する場合、未来語りの効果的な展開のためにどのような工夫が必要か

3. 研究の方法

1) デザイン：介入研究を行った。

2) 協力者：研究協力を同意が得られた、4 件のミーティングの参加者 32 名（ミーティング参加者 21 名、ファシリテーター 8 名、コーディネーター 3 名）が研究協力者となった。

※コーディネーター：ファシリテーターと AD 参加者の連絡調整を行い、ミーティング開催のコーディネーションを担う者である。また、ミーティング前にウォリー提供者のウォリーを明らかし、様々な予測を行うプロセスのサポートを行う。これは『Taking up one's worries』というプロセスで、この中で、ウォリーを放置することでどのようなことが生じるのか、それがウォリー提供者自身にとってどのような影響を与えるか、ミーティングで生じる反応や結果について具体的な予測を行う。

3) データ収集方法

- ①未来語りを録画し、音声については逐語録をおこした。映像データは、AD の流れや参加者の非言語的メッセージで気になる身体の動きや表情、声の大きさ、トーン等を字幕データにおこした。
- ②当事者と家族に対し、半構造的なインタビューを実施し、インタビュー内容を録音し、逐語録におこした。質問内容は、未来語りがどのような体験だったか（参加して良かった点、しんどかった点、印象的だった場面や発言内容とその理由、内的対話の生起、身体反応など）これからの生活に役立ちそうか、改善点等とした。
- ③支援者に対して、半構造的なインタビューを実施し、インタビュー内容を録音した。質問内容は、未来語りがどのような体験だったか（参加して良かった点、しんどかった点、印象的だった場面や発言内容とその理由、内的対話の生起、身体反応など）、内的な対話これからの支援に役立ちそうか、改善点等とした。
- ④コーディネーターとファシリテーターに対して、半構造的なインタビューを実施し、インタビュー内容を録音させてもらい、逐語録におこす。質問内容は、日本で ASD 者支援としての未来語りについて、その効果や工夫点、ファシリテーター同士の協働について気づいた点や感じた点、等である。

4) 分析方法

- ①映像データについては、進行方法や未来への移行、質問の順番、構造、リフレクティング等、各ミーティングの特徴を抽出した。さらに、参加者の印象的な非言語的なメッセージを含む言動を抽出した。

- ②当事者と家族のインタビューデータについては、全体の文脈を考えながら、未来語りの体験や効果、改善点に関する内容を抽出し、カテゴリー化を行った。
- ③支援者のインタビューデータについては、全体の文脈を考えながら、未来語りの体験や効果、改善点に関する内容を抽出し、カテゴリー化を行った。
- ④ファシリテーターのインタビューデータについては、全体の文脈を考えながら、未来語りの効果や必要な工夫点、改善点に関する内容を抽出し、カテゴリー化を行った。

4. 研究成果

本研究では、計 32 名の協力者達の豊富な語りにより、非常に豊かな結果が得られた。本節では、まず協力者の概要について述べた後、参加者の体験について述べる。その後、コーディネーターとファシリテーターから得られた ASD 特性をもつ人が参加する場合の工夫と我国で AD の汎用性を高めるための方略について述べる。

1) 研究協力者

4名のウォリー提供者より研究協力が得られたため、4件のミーティングを開催した。研究協力者は、ミーティング参加者 21 名、各ミーティングのファシリテーター8名、コーディネーター3名（ミーティング C, D のコーディネーターは同じであるため、両ミーティングの終了後にインタビュー実施）の計 32 名であった（表 1 参照）。

表 1. 対象ミーティングの参加者の基礎情報

ミーティング	ウォリー提供者	ASD特性をもつ当事者 (年代、性別)	家族の参加	支援者の参加 (ウォリー提供者除く)
A	訪問Ns	A氏 (10代、男性)	母・妹	3名 (訪問Ns: 3名)
B	訪問Ns	B氏 (20代、女性)	母	1名 (訪問Ns)
C	相談支援専門員	C氏 (30代、男性)	なし	3名 (デイケアスタッフ: 1名、相談支援専門員: 1名、心理専門職: 1名)
D	相談支援専門員	D氏 (40代、男性)	姉	2名 (デイケアスタッフ: 1名、訪問Ns: 1名)

2) ミーティング参加者の体験

分析の結果、参加者のミーティング中の体験として、【未来への移行体験】【内的世界に生じた変化】【関係性に生じた変化】【抱える課題に生じた変化】の4つの共通のカテゴリーが明らかとなった。サブカテゴリーについては共通するものもあったが、個々によって様々であった。以下、各サブカテゴリーについて、ASD 特性をもつ当事者、家族、支援者の順に述べる。サブカテゴリーについては、《 》で表記する。

(1) ASD 特性をもつ当事者の体験

【未来への移行体験】については、A氏は《スムーズな未来への移行》ができていたが、B氏は《現在の心配と良い未来との間の彷徨い》を体験し、C氏は《緩やかな未来への移行》を体験しており、それぞれ異なっていた。D氏は、コーディネーターとファシリテーターの判断で、良い未来の想定は行ったものの、未来への移行は行わない方法をとった。

【内的世界に生じた変化】は、《自分が大切にされている実感》を体験した者が3名いた。その他はそれぞれ異なっており、多くは肯定的な体験であったものの、D氏は《嫌な体験の想起による辛さ》も体験していた。

【関係性に生じた変化】は、共通するものが多く、《他者理解の深まり》を3名が、《自分の思いを伝えられた実感》を3名が体験していた。

【抱える課題に生じた変化】は、A氏は《心配の解消》、C氏は《心配の軽減》を体験した一方で、B氏とD氏は、《心配に変化なし》という体験であった。詳細は、表 2 に示す。

表2. ASD特性をもつ当事者の体験

大カテゴリー	A氏 (サブカテゴリー)	B氏 (サブカテゴリー)	C氏 (サブカテゴリー)	D氏 (サブカテゴリー)
未来への移行体験	スムーズな未来への移行	現在の心配と良い未来との間の彷徨い	緩やかな未来への移行	(未来への移行なし)
内的世界に生じた変化	自分が大切にされている実感	自分が大切にされている実感	視野の広がり	自分が大切にされている実感
	生きている感覚の取り戻し		新たなスタート	嫌な体験の想起による辛さ
	自分との向き合い 心地よい体験			
関係性に生じた変化	他者理解の深まり	他者理解の深まり	すれ違いの解消	他者理解の深まり
	人との繋がりの実感	自分の思いを伝えられた実感	自分の思いを伝えられた実感	自分の思いを伝えられた実感
抱える課題に生じた変化	心配の解消	心配に変化なし	心配の軽減	心配に変化なし
		希望ある未来への望み		

(2) 家族の体験

C氏は、家族の参加がなかったため、その他の3名の家族について述べる。【未来への移行体験】について、A氏の家族は、本人同様《スムーズな未来への移行》を体験していた。B氏の家族は、やはり本人同様《現在の心配と未来の間の彷徨い》を体験しており、《戸惑いながらの移行》も体験していた。D氏は、未来への移行は行わなかったものの、良い未来についての想定は行った。家族は、その想定した未来の時期が自分の感覚とは合わず、《良い未来の時期の感覚のズレ》を体験していた。

【内的世界に生じた変化】は、共通するサブカテゴリーはなく、それぞれ異なっていた。A氏の家族は全て肯定的な体験だったものの、B氏の家族は、《心配のつきまとい》、D氏の家族は《葛藤と向き合う辛さ》なども体験していた。

【関係性に生じた変化】は、A氏家族とB氏家族がともに《他者理解の深まり》をしていた。それ以外は異なる体験であった。

【抱える課題に生じた変化】は、A氏家族とB氏家族がともに《心配の軽減》と《‘今’の肯定》を体験していた。《‘今’の肯定》は、過去と比べて今が良い状態であることを認識する体験である。詳細は、表3に示

表3. 家族の体験

大カテゴリー	A氏家族 (サブカテゴリー)	B氏家族 (サブカテゴリー)	D氏家族 (サブカテゴリー)
未来への移行体験	スムーズな未来への移行	戸惑いながらの移行	良い未来の時期の感覚のズレ
		現在の心配と未来の間の彷徨い	
内的世界に生じた変化	自己肯定	心配のつきまとい	葛藤と向き合う辛さ
	自分との向き合い	腑に落ちる体験	
	安心		
	再決断		
関係性に生じた変化	他者理解の深まり	他者理解の深まり	1人じゃない安心感
	自分の思いを伝えられた実感	自分の思いを伝えられた実感	
	ありのままを理解してもらえる体験		
抱える課題に生じた変化	心配の軽減	心配の軽減	心配に変化なし
	今'の肯定	今'の肯定	
	コントロール感の向上	コントロール感の向上 新しいアイデアの生起 やるべきことの明確化	

(3) 支援者の体験

ADの構造上、未来への移行の鍵を握っているのは当事者と家族であるため、今回の調査では、支援者の支援者の【未来への移行体験】については明らかにしなかった。

【内的世界に生じた変化】については、《自分との向き合い》《自由》《視野の広がり》《エンパワメント》を複数の支援者が体験していた。

【関係性に生じた変化】は、全てのミーティングにおいて支援者は《連帯感の強まり》を体験していた。《他者理解の深まり》についても複数の支援者が体験していた。

【抱える課題に生じた変化】は、《心配の軽減》《先の見通しの明確化》を複数の支援者が体験していた。また、通常の会議のような明確な決め事をしない方法について《不確実さへの不安》を体験した支援者もいた。詳細は、表4に示す。

表4. 支援者の体験

大カテゴリー	A氏支援者 (サブカテゴリー)	B氏支援者 (サブカテゴリー)	C氏支援者 (サブカテゴリー)	D氏支援者 (サブカテゴリー)
内的世界に生じた変化	自分との向き合い	肩の荷が軽くなった感覚	自由	自由
	人生観が変わる体験		視野の広がり	視野の広がり
	自分の開放		エンパワメント	エンパワメント
	未来の自分達からケアされる体験		言葉にすることの迷い 安心	自分との向き合い 主体感 自分を俯瞰する体験 言葉にならない思い
関係性に生じた変化	連帯感の強まり		連帯感の強まり	連帯感の強まり
	他者理解の深まり		他者理解の深まり	思いを伝えられた実感
	本人・家族のもつ力への信頼の樹立		本人への関心を伝える機会 聞いてもらった実感 関わりのきっかけ	家族の頑張りの共有
抱える課題に生じた変化	心配の解消	心配の軽減	心配の軽減	心配の軽減
	先の見通しの明確化		先の見通しの明確化	先の見通しの明確化
	反省のない解決			不確実さへの不安
	コントロール感の向上			

3) ASD 特性をもつ人が参加する場合の工夫

コーディネーター、ファシリテーター達は、ASD 特性をもつ参加者のために、事前準備と進行方法について工夫が必要だと考えていた。事前準備としては、《ED (Early Dialogue) で特性理解を踏まえた予測》をすること、《ミーティング前の過ごし方の工夫》することであると考えていた。ED には、ミーティング中に生じる可能性があることを予測するプロセスが含まれているため、そのプロセスをしっかりと踏むことで、特性への必要な配慮も含めた準備が可能であるとと考えていた。進行方法における必要な工夫としては、《構造の盤石化》《情報の視覚化》《大げさなジェスチャー》《シンプルな問いかけ》《事前説明通りの進行》《本人にあった方法での未来への移行》が重要であると考えていた。

4) 我国で AD の汎用性を高めるための方略

コーディネーター、ファシリテーター達は、我国で AD の汎用性を高めるための方略として、《ファシリテーター・コーディネーター派遣制度の構築》《地域や組織単位での取り組み》《馴染みある言葉への変換》《父親が参加できる方法の模索》が必要だと考えていた。

《地域や組織単位での取り組み》は、地域全体で AD を知ってもらおう機会をつくることや、トップマネジメントの理解に基づき、地域や事業所単位で取り組むことである。また、《ファシリテーター・コーディネーター派遣制度の構築》とも関連する内容であるが、地域や学校、法人にコーディネーターが1人いると浸透しやすいと考えていた。《馴染みある言葉への変換》は、AD においては、『ウォリー』や『未来への移行』『心配事を和らげる』など耳慣れない言葉が多く使われているため、馴染みやすい言葉に変えた方が汎用性が高まるのではないかという考えである。また、《父親が参加できる方法の模索》は、労働時間の長いことや母親に家庭内のことを任せられることが多い日本において、父親がミーティングに参加することの困難さの指摘である。そのため、父親がミーティングそのものに参加する方法に加え、参加できなかった場合のフォローもふくめた対応が必要であるという考えである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kawada M. & Nojima S.	4. 巻 7(1)
2. 論文標題 Evaluating the Effects of the Empowerment Program for Parents of Adults with High-Functioning Autistic Spectrum Disorder	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Psychosocial Rehabilitation and Mental Health	6. 最初と最後の頁 27-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s40737-020-00155-y	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川田美和	4. 巻 51
2. 論文標題 未来語りのダイアログの実際と意義 対話のもつ力	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 看護研究	6. 最初と最後の頁 112-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	野嶋 佐由美 (Nojima Sayumi) (00172792)	高知県立大学・看護学部・特任教授 (26401)	
研究分担者	坂下 玲子 (Sakashita Reiko) (40221999)	兵庫県立大学・看護学部・教授 (24506)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	岡田 俊 (Okada Takashi) (80335249)	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所 知的・発達障害研究部・部長 (82611)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関